

【解答時間 90 分】

○次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて、国際社会において経済的な相互依存を深めることは、平和への最も確実な道であると信じられていた。十九世紀から二十世紀初頭にかけての自由主義的な信念によれば、国境を越えた自由貿易が活発化し、各国の経済が不可分に結びつくならば、戦争による経済的損失は耐え難いものとなり、合理的判断として武力衝突は回避されるはずであった。これは、国家を「利益の体系」として捉える視点に基づく平和観である。しかし、二十一世紀の今日、この楽観的な前提は根本的な揺らぎを見せている。経済的な繋がりが深まる一方で、その繋がりが相手を威圧する「武器」として転用される「経済安全保障」の時代が到来したからである。

経済安全保障とは、自国の生存や繁栄に不可欠な物資や技術、インフラを外部の脅威から守り、他国への過度な依存を回避しようとする試みである。ここで生じているのは、国家が「利益の体系」でありつつ、同時に生存を賭けた「力の体系」として振る舞わざるをえないという構造的矛盾である。特定の国が半導体や重要鉱物などの供給を独占し、それを政治的な要求を呑ませるための交渉材料として用いるとき、経済的な相互依存は「平和の絆」から「戦略的脆弱性」へと反転する。

(中略)

このような状況において、多くの国家は供給網(サプライチェーン)の「デリスクング(リスク低減)」を急いでいる。しかし、特定の国からの供給を遮断しようとする試みは、長年築き上げた効率的な生産体制を破壊し、自国民の生活コストを上昇させるというジレンマを伴う。利益を最大化しようとする経済合理性と、安全を最大化しようとする政治論理が正面から衝突しているのである。さらに、この対立をより解決困難なものにしているのが、第三の側面である「価値の体系」である。

現代の経済安全保障を巡る議論は、単なる効率や安全の問題に留まらない。例えば、供給網の背後にある強制労働の有無や、技術の軍事転用に伴う人権侵害の懸念など、その国がどのような「正義」や「常識」を掲げているかという価値観の相違が、取引の是非を左右する決定的な要因となっている。(a)国際社会にはいくつもの正義が存在し、それらが経済取引という目に見える活動を通じて衝突しているのである。

平和の問題に対する私たちの態度は、しばしば「軍備をなくせばよい」あるいは「悪役を除去すればよい」といった単純な思考、すなわち(b)「知的な怠惰」に陥りがちである。しかし、現実の国際政治は、力と利益と価値の三つの層が複雑に絡み合った複合物である。経済安全保障という難問

を前に、私たちは「利益」のために「安全」や「価値」をどこまで犠牲にできるのか、あるいはその逆は可能かという問いを突きつけられている。

問 1 下線部(a)について、なぜ国際社会には「いくつもの正義」が存在すると筆者は述べているのか。文章中の語句を用いて、180 字以内で説明しなさい。

問 2 下線部(b)「知的な怠惰」について、平和の問題においてどのような態度を指すと筆者は述べているか。200 字以内で説明しなさい。

問 3 「経済安全保障」という概念は、今後の国際協力や平和のあり方にどのような影響を与えると考えられるか。本文の内容やこれまでの学習をふまえ、あなたが重要だと考える視点を含めて 600 字以内で述べなさい。